



地域と連携した実践力ある環境教育教員養成カリキュラムの構築と実践(1)  
北海道教育大学地域教育開発専攻のカリキュラム設計

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-01-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 生方, 秀紀, 北澤, 一利, 諫山, 邦子, 平岡, 亮, 高橋, 忠一, 田丸, 典彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00008367">https://doi.org/10.32150/00008367</a>

## 地域と連携した実践力ある環境教育教員養成カリキュラムの構築と実践(1) 北海道教育大学地域教育開発専攻のカリキュラム設計

生方 秀紀<sup>1</sup>・北澤 一利<sup>2</sup>・諫山 邦子<sup>3</sup>  
平岡 亮<sup>2</sup>・高橋 忠一<sup>4</sup>・田丸 典彦<sup>5</sup>

北海道教育大学釧路校：<sup>1</sup>理科教育講座・<sup>2</sup>保健体育教育講座  
<sup>3</sup>学校教育講座・<sup>4</sup>社会科教育講座・<sup>5</sup>技術科教育講座

### Construction and Implementation of a Curriculum for Training Environmental Education Teachers Who Have Skills to Practice in Cooperation with a Community (1):

The Process of Designing The Curriculum of The Course of Community Education  
Development of Hokkaido University of Education

Hideonri UBUKATA<sup>1</sup>, Kazutoshi KITAZAWA<sup>2</sup>, Kuniko ISAYAMA<sup>3</sup>,  
Akira HIRAOKA<sup>2</sup>, Tadaichi TAKAHASHI<sup>4</sup>, Norihiko TAMARU<sup>5</sup>

<sup>1</sup>Department of Science Education, <sup>2</sup>Department of Health and Physical Education,  
<sup>3</sup>Department of School Education, <sup>4</sup>Department of Social Studies Education, and <sup>5</sup>Department of  
Technology Education; Hokkaido University of Education Kushiro Campus

#### Summary

The curriculum of the Course of Community Education Development of Hokkaido University of Education was worked out through spirited discussions and the exchange of ideas among the appointed teaching staffs of the course, being unique and original among other teacher training courses in Japan. The curriculum aims to train elementary school teachers who have competences of communication, planning, action and practicing. For this aim, it involves experiential and practical actions in cooperation with local organizations/persons taking a variety of natural environments and human local communities as their fields. During the first and second grades, the students are to be trained to enhance their ability to read/think and discuss; to participate outdoor/volunteer activities, nature/industrial experiences; and to connect these experience with the knowledge provided by introductory and subject-integrated lectures. And then they are to challenge to develop environmental/community education programs through taking special subjects and their practices during the third and fourth grades.

#### はじめに

21世紀にはいり、地球温暖化、砂漠化、海洋汚染、生物多様性の減少などの地球環境問題はますます深刻化しているが、これは人間社会の政治経済システムやライフスタイル、貧困や人口問題などともからまり合う複雑な問題として捉えられている(阿部 2005、Gregorio 2006)。した

がって、環境教育は個々の環境問題について学び、問題解決していく力をつけるというものから、自然環境と人間社会をトータルにとらえ、より根本的な原因を探る中から問題を解決していく能力を育むものへと、内容・方法とも変革を迫られている。

学校教育、とくに初等教育における環境教育においては、学校を取り囲む地域をフィールドとし、そこにおける

自然（生態系）と人や社会とのかかわり、地域における人々の暮らしや文化を体験的・実践的に学び、また地域活動に参加していくことで、概念としてでなく、実体としての環境の認識と価値意識の形成を促すことができるであろう。この学習体験や知識は、中等・高等教育において間接的な知識伝達に頼らざるを得ないグローバルな環境問題やこれらの問題と社会経済システムとのかかわりなどを理解していく上での基礎となるに違いない。

学校教育、とりわけ初等教育教員の養成を行う教員養成系大学・学部における環境教育カリキュラムには、このような時代の要請に応えるかたちでのカリキュラム構築、教員配置、効果的な教育実践、そして評価を行っていくことが求められる。大学設置基準の大綱化以来、各大学独自の自主的な課程・専攻配置、それにとりま教員の再配置の道が開かれており（出光 1997）、社会のニーズに応えるかたちの大胆なカリキュラム編成が可能となっている。

北海道教育大学の大規模なキャンパス・課程再編に伴い、2006年に釧路校教員養成課程に「地域教育開発専攻」を含む3専攻が発足した。この課程再編の過程での「地域教育開発専攻」のカリキュラム構築は、当該専攻担当予定教員の見識やアイデアを縦横に織り込みながら上述の視点による実践への道を切り開くものであり、大学におけるカリキュラム研究の1実践例としてここに報告する。

## 専攻カリキュラムの構築

### 1. キャンパス・課程再編の確定からカリキュラムの原案策定までの経過

北海道教育大学のキャンパス・課程再編は、各分校教授会の意見を聴取しつつ、学長・理事・副学長・事務局長によって構成される「再編実施本部」および同本部直属の「設置準備室」の主導で推進され、2004年10月に「基本計画」が提示された。この再編に伴う教員養成課程のカリキュラム編成は、「教員養成ワーキンググループ」での検討成果を受け継いだ「新教員養成課程設置準備室」で検討され、同年12月にはカリキュラム編成の基本方針および課程ごとの「履修基準案」（資料1）が承認された。

釧路キャンパスの3専攻の「教育目的」および「専攻履修基準原案」は、これと平行して同準備室の「釧路キャンパス分室」によって検討が進められた。「釧路キャンパス分室」は準備室員2名に各専攻担当予定者から2名ずつの教員を加えたメンバーよりなるものであるが、全学の教員の担当専攻意向調査が実施され、その結果が判明した2005年1月までは「地域教育開発専攻」担当予定者は確定していなかった。分室でこの専攻を担当していた2名の教員は、1月後半に確定した担当予定者の中に加わっていなかったため、加わっている教員の中から教員H.U.と教員A.H.が同年2月から替わって分室の議論に加わるようになった。

この分室メンバーの一部交代前の2004年11月に作成された「地域教育開発専攻の特色」および「地域教育開発専攻履修基準（原案）」をそれぞれ資料2、資料3に示す。今回のカリキュラム構築の対象は、資料1で太字とした「専攻科目」（16単位）および「研究発展科目」（10単位）の内容構成と履修順についてであるが、検討過程の途中までは専攻科目の構成のほうに議論を集中させ、研究発展科目については専攻科目が煮詰まった後でそれと整合するかたちで積み上げられた。資料3は「専攻科目」（16単位）についての原案である。

#### 資料1. 教員養成課程履修基準案.

「3設置準備室合同会議」による。（2004年11月26日）

【小学校教員養成を主とする専攻】（以下、数字は単位数）

◇卒業に必要な単位数124：

◇教養科目24：

日本国憲法2、体育科目2、現代を読み解く科目群2、コミュニケーション科目群4、地域学科科目群2、子ども理解に関する科目群2、大学基礎科目群4、全学連携科目・選択科目6

◇専門科目90：

実践教育科学科目20、教育実践フィールド研究科目（教育実習、教育フィールド研究、教育実践論）14、教科指導研究科目（小学校教科指導法）18、教科内容研究科目及び専攻科目（教科内容研究科目18、**専攻科目16**）、学士論文4

◇全学連携科目・研究発展科目10：

#### 資料2. 釧路キャンパス各専攻の特色.

「新教員養成課程設置準備室」の「釧路キャンパス分室」による。（2004年11月）

【地域教育開発専攻】

本専攻は、「環境」という現代的な課題を、北海道の地域的特性を生かしつつ学校のカリキュラムに採り入れ、これを実際の授業に展開していく力量をもった主に小学校教員の育成を目指す。

人間を取り巻く「環境」には、「自然環境」・「生活環境」・「社会環境」・「人間環境」などがある。本専攻では、それぞれに対応した「環境教育」のプログラムを用意する。すなわち、前二者については、地域環境からグローバルな地球環境まで幅広い分野にまたがった教育を実践できる教師の養成を行う。地域の自然・生活環境に密着した教育素材を前提に、自然体験学習のプログラム研究、生産から消費までの生活現場に定位した実践的な技能指導など、情報技術を含めた環境教育の実践的研究指導を行う。

一方、後二者に対応しては歴史や文化、社会の仕組みなどの「社会・文化環境」、さらには地域に特有の風土に根ざした広い意味での環境について、幅広い知識を持って教育できる能力を育てる。それらと関連する諸問題を社会科学

や人文科学の知識を基礎にしてとらえ直し、独自の視点と幅広い視野をもった教員を養成する。そのために、机の上で学習するだけでなく、自然や社会つまりフィールドに積極的に出て行って見聞を広げる「体験学習」・「野外活動」も採り入れる。

**資料3. 地域教育開発専攻履修基準（原案）.**

「専攻科目」の部分抜粋、釧路校再編準備委員会による。（2004年12月17日）

◇専攻科目16：

基礎講読Ⅰ～Ⅱ、野外教育Ⅰ～Ⅳ、環境教育Ⅰ～Ⅳ、野外教育演習Ⅰ～Ⅷ、野外教育実習Ⅰ～Ⅷ、環境教育演習Ⅰ～Ⅷ、環境教育実習Ⅰ～Ⅵ、環境教育実験Ⅰ～Ⅳ

**2. 専攻担当予定教員によるカリキュラムの練り上げ**

上述の原案を受けて、各専攻の担当予定教員（2005年1月後半からは意向調査が済んでいるので担当はほぼ確定）間で、専攻カリキュラムを同年2月末日までを目処に検討し、分校再編準備委員会を経て再編実施本部に上げていくというタイムスケジュールのもと、地域教育開発専攻の担当予定者の間で活発な議論が行われ、カリキュラムが練り上げられていった。2004年12月13日から最終案を本部に提出した2005年3月16日までに、本件にかかわって本専攻担当予定者による会合（以後、「専攻会議」と呼ぶ）が12回開催された。この会議の司会を務めていた教員H.U.はこの議論を促進する手段の一つとしてメーリングリストを立ち上げている。また、本部に提出後のやりとりの中での微修正や、2006年度の新規教員採用人事にあたっての新設科目の検討にかかわって、専攻カリキュラム関連の「専攻会議」は2005年3月20日から9月末までに7回開催された。

以下、「専攻会議」における専攻の特色の明瞭化、専攻カリキュラムの全体構想から細部の練り上げまでの経過に沿うかたちで、提出された意見やアイデアを紹介する。

**(1) 自然体験・自然環境・持続的開発の3分野に分けて教育する案**

専攻会議での討議のごく初期に、本専攻の学生を自然体験・自然環境・持続的開発の3分野に分けて教育する案（資料4）が教員H.U.により提出された。これは「持続可能な開発のための教育」（ESD）および地域における実践と体験を強く意識した内容の提案であったが、「設置準備室」の室員である教員から、「どちらかという中高、あるいは新課程向けに見える。小学校における野外教育、環境教育を「特別活動」や「総合的な学習」などのかたちで現場で実践できるようにするものが望ましい」とのコメントが提出された。この提案およびコメントは以後の

検討において反映されることになる。

**資料4. 地域教育開発専攻カリキュラム案.**

教員H.U.による。（2004年12月21日）

**1. 分野構成**

- ・学生40名を13～14名ずつ、3分野に分けて教育する。
- ・それぞれの分野に統一性（まとまり）があること。
- ・講座間の相互乗り入れを採用するが、あまりにもシャッフルして特性を失うことのないようにする。

**(1) 自然体験教育分野：**

野外教育、体験教育、冒険教育、食と農の教育などの地域における教育が心身の発達や心身の健康に与える影響を研究・教育する。地域での実践的な教育活動を多く取り入れる。

◇教員構成：教育内容方法1名、体育科2名、技術科1名、人間科学1名

**(2) 自然環境教育分野：**

地域の自然環境を構成する諸要素のつながりを、実際の調査・体験活動を通して研究・教育し、それら自然環境の価値やそれを守る教育のあり方について、地域における実践を通して開発していく。

◇教員構成：理科4名、社会科1名

**(3) 持続的開発と環境分野：**

人間の経済活動や社会活動と環境との関係を、地域における実践を通して教育・研究し、持続可能な開発を実現するための教育のあり方を探る。

◇教員構成：社会科2名、地域文化1名、技術科2名

**2. カリキュラム編成方針**

- ・授業名を見て、専攻の学習内容がイメージできるもの。
- ・授業が「寄せ集め」ではなく、相互に有機的につながり、全体像が描けるもの。

**(1) 自然体験教育分野：**

野外教育と体の発達Ⅰ～Ⅱ、自然体験と心の発達Ⅰ～Ⅱ、自然体験と地域教育Ⅰ～Ⅱ、体験教育と健康Ⅰ～Ⅱ、食と環境Ⅰ～Ⅱ

**(2) 自然環境教育分野：**

自然環境の教育Ⅰ～Ⅱ、生物多様性と環境教育Ⅰ～Ⅱ、環境地理学Ⅰ～Ⅱ、地球環境と人間Ⅰ～Ⅱ、人間生態系と物質循環Ⅰ～Ⅱ

**(3) 持続的開発と環境分野：**

持続的開発と社会、地域社会と環境Ⅰ～Ⅱ、地域と人のつながりⅠ～Ⅱ、環境と情報Ⅰ～Ⅱ、地域社会と情報ネットワークⅠ～Ⅱ

**(2) 本部「設置準備室」による地域教育開発専攻のカリキュラム原案**

2005年2月早々に、再編準備室による地域教育開発専攻のカリキュラム原案が示された。本専攻にかかわる部分を資料5に示す。この原案は2004年12月下旬の「専攻会議」の議論とその後の分校「再編準備委員会」での議論を経て作成されたものであるが、「専攻会議」の議論がまだ不十

分な段階で作成されたため、11月段階の釧路校再編準備委員会による原案（資料3）と大同小異の、授業科目名がイメージに乏しく実体が見えにくいものであった。

資料5. 地域教育開発専攻のカリキュラム原案。(抜粋).  
大学本部「設置準備室」による。(2005年2月1日)

◇専攻共通科目:

基礎講読ⅠA～ⅠC、基礎講読ⅡA～ⅡD、野外教育入門、環境教育入門、野外教育の基礎、環境教育の基礎

◇分野科目(野外教育分野):

野外教育方法演習Ⅰ～Ⅳ、野外教育活動演習Ⅰ～Ⅻ、野外教育演習Ⅰ～Ⅻ、野外教育実習Ⅰ～Ⅷ

◇分野科目(環境教育分野):

環境教育方法演習Ⅰ～Ⅳ、自然環境教育演習Ⅰ～Ⅻ、地域環境教育演習Ⅰ～Ⅻ、環境教育実習Ⅰ～Ⅶ

(3) 野外教育・地域環境教育の2分野に分けて教育する案  
前記の3分野に分けて教育する案(資料4)の難点を克服するものとして、2月初めに、野外教育・地域環境教育の2分野に分けて教育する案(資料6)が教員H.U.により提案された。この時点までには、当該専攻を担当予定の教員がほぼ確定し、各教員の専門分野を念頭に置きながら、より具体的な専攻カリキュラムを構想することが可能になっていた。提案では、この専攻のうち、環境教育分野のコンセプトを明確にし、内部の概念を有機的・立体的に関連付けるべきこと、そして担当教員がこのコンセプトに即して連携することの必要性を付記している。

資料6. 地域教育開発専攻カリキュラム案。

教員H.U.による。(2005年2月1日)

1. 分野構成

- ・学生40名を約半数に分け、2分野に分けて教育する。
- ・それぞれの分野に統一性(まとまり)があること。

(1) 野外教育分野:

<内容省略>

◇教員構成:教育内容方法1名、体育科3名、地域文化1名、人間科学1名

(2) 地域環境教育分野:

地域の自然環境を構成する諸要素のつながりを、実際の調査・体験活動を通して研究・教育し、それら自然環境の価値やそれを守る教育のあり方について、地域における実践を通して開発していく。

◇教員構成:理科3名、社会科2名、技術2名、地域文化1名

2. カリキュラム編成方針

- ・授業名を見て、専攻の学習内容がイメージできるもの。
- ・授業が「寄せ集め」ではなく、相互に有機的につながり、全体像が描けるもの。
- ・教科の枠を意識した学校カリキュラム開発専攻とは異

なり、「地域」「環境」「教育」をキーワードに総合的・融合的な内容のカリキュラムを構築する。

(1) 野外教育分野:

<省略>

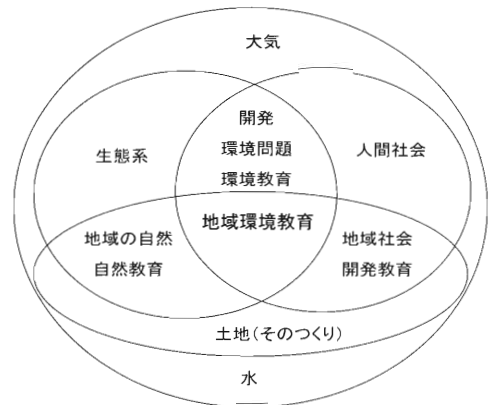
(2) 地域環境教育分野:

◇分野共通科目(複数教官が異分野相乗りで演習を行う):  
地域環境教育基礎演習Ⅰ～Ⅱ、地域開発教育基礎演習Ⅰ～Ⅱ

◇卒論ゼミ系列(個々の教官が自分の専門に近い分野で指導するが、広く受講させる):

自然環境と教育Ⅰ～Ⅱ、地域の生態系と環境教育Ⅰ～Ⅱ、地域の間人環境と教育Ⅰ～Ⅱ、環境とモラルの教育Ⅰ～Ⅱ、私たちの大地と生活Ⅰ～Ⅱ、大気や水と人間Ⅰ～Ⅱ、食糧生産活動と環境Ⅰ～Ⅱ、工業生産活動と環境Ⅰ～Ⅱ

※地域環境教育分野の概念図 (教員H.U.)



(4) 地域教育開発専攻の理念と特色化についての提案

地域教育開発専攻の理念と特色化についての提案が、上記の提案に触発された教員K.K.により、その翌日になされた(資料7)。この提案者は、「徒労を避けるために、あらかじめ我々の裁量内でできることを明らかにし、我々に与えられた条件の優先順位を明確にすべきである。その上で、担当する教員が力を合わせて取り組めるような、地域教育開発専攻の理念と特色化を考えたい。そして担当者同士が一致点を見いだして、合意を形成していく必要がある。」と書き添えている。

この提案には、その根拠となる「どのような教師が求められているのか」および「高校生は大学に何を求めているのか」についての、権威のある情報源とその内容分析が付随しており(資料8、資料9)、たいへん説得力があった。とりわけ、地域と連携した大学における教員養成教育のあり方について具体的なイメージを提供した点、その後の論議の方向付けを与えるものとなっている。

分野構成は「野外教育分野」と「環境教育分野」の2つから成るもので、野外教育の意味を広くとらえ、「アウトドア活動」、「課外活動」および「地域社会活動」を

含めている。この提案に対し、他の教員から「野外教育」はもう少し狭い意味のイメージが強いので「地域実践教育」としてはどうかという意見も出されたが、当該分野における教育活動の内容の大枠はその後の検討でも受け継がれていくことになる。

資料7. 地域教育開発専攻の理念と特色化。

教員K.K.による。(2005年2月2日)

イ) 前提条件:

1. 小学校教員の養成を行う(根拠:中期計画、再編理念)
2. 他の大学や分校にはない釧路オリジナルの特色を明確にする(根拠:再編計画)
3. 野外、自然、地域社会をフィールドとした実践活動を行う(根拠:釧路校内部合意)
4. 地域連携や地域との共同事業を推進する(根拠:中期計画、再編理念)
5. 現代社会が求めている教師の育成をめざす(根拠:資料8-(1)、資料9)
6. 高校生の期待に応えるような魅力のある専攻をつくる(根拠:資料8-(2))

ロ) 予定担当スタッフ:

教育学(野外教育)、保健体育(野外活動、課外活動)、保健体育(健康管理・保健教育)、保健体育(スポーツ・健康文化)、地域文化(→地方自治、地方行政論、または地域文化論など)、人間科学(→地域教育、地域連携、地方史、あるいはコミュニティー論)、理科(環境教育)、社会科(自然地理)、技術科(農学)、技術科(機械工学)、技術科(電気工学)、新規(→理科、自然観察、環境教育プログラム開発)、新規(→各種学校イベントマネジメント、観光業、ツアーガイド)

上記条件イ)、ロ)をもとに、担当スタッフの顔を思い浮かべて考えると、次のような目標ができるのではないかと思います。

【野外教育分野の目標】

「野外活動」という言葉には、屋外の雄大な自然をフィールドとする「アウトドア活動」という意味の他に、学校のサークルや運動部活動などの「課外活動」、あるいは学校外部の住民や団体との交流やボランティア活動などの「地域社会活動」という意味を含むと考えることにしよう。これから、この三つの分野の特色と教育目標を具体化してみたい。

アウトドア活動は、活動自体がハードで根気と我慢が必要なことに加え、天候の変化やトラブルなど予期せぬ状況に直面することが多い。そのため、どんな状況にも対応できる綿密な計画と準備が必要であり、また仲間と協力して問題を解決したり、リーダーシップを発揮して困難を克服したりするなどの組織的な活動が求められる。こうした組織的な協力活動を経験することは、小学生のコミュニケーションスキルや問題解決能力を向上させる。そこでこのア

ウトドア活動では、北海道の山や川、海や湿原などのフィールドを舞台にしたスリリングな活動を通じて、アウトドア活動に必要な基礎的な知識を学び、これを小学校教育に取り入れて教材をつくるための技能を養うことを目標とする。

課外活動とは、文字通り文化系サークルから運動部活動まで、幅広いタイプの組織的活動が含まれる。そのもっとも大きな特徴は、自ら進んで得意なことを「自発的」に行うという点と、仲間と一緒に大きな目標にチャレンジし、夢中になって同じ時間を共有する点にある。そのため、チームメイトとの人間関係の齟齬や葛藤を経験したり、あるいは試合に勝ったり負けたりというドラマチックな経験を味わうことが多い。小学生がこうした機会を得るならば、彼らは自己の存在を肯定し「自尊心」を高め、仲間との「連帯感」や目標の「達成感」といった貴重な財産を得ることになるだろう。そこで、この課外教育では、こうした貴重な経験をいかに小学校にシステムチックに取り入れるのか、また課外活動の運営をどのようにおこなうのかといった現場で役に立つ実用的なスキルを訓練することを目標とする。

地域社会活動は、一般的には広くさまざまな分野にわたるが、ここではすでに釧路校で実績がある地域住民を対象とした健康教室を一例としてあげよう。この事業は直接小学生を対象とするものではないが、しかし今日の社会が要求する教員を養成するために必要な基礎的な訓練が可能である。それは企画段階から運営と実施に至るまで、すべて学生が組織的に参加する点にある。高齢者と一緒に行う運動はさほど難しいものではないが、教室を事業として立ち上げて継続的に実施していくには、スケジューリングの調整、関係機関や住民との協働など、非常に多くの障害や困難が伴う。それらに直面するたびに、学生にはマネジメントスキルと対人関係を円滑に築くソーシャルスキルを高めていくことが求められるのである。そこで、この地域社会活動では、学生にこうした実社会での活動のチャンスを与え、事業を成し遂げる成功経験を与えることによって、学生の自信と自負を育て、社会の一員として行動する責任感を養い、社会に貢献しようとする意欲や自尊心を高めることを目標とする。

【地域教育開発専攻・専攻科目】(16単位)

◇共通科目(必修):

基礎講読ⅠA～ⅠC、基礎講読ⅡA～ⅡD、野外教育入門、環境教育入門

◇共通科目(選択):

アウトドア活動の基礎知識、学校部活動の意義と運営、小学生のからだの発育発達、PTAと小中学校、自然保護論、自然地理学、湿地の生物観察、酪農と地域教育、産業技術と地域教育

◇分野科目(野外教育分野):

季節のアウトドア活動と授業計画、運動行事の企画と運営、健康管理と地域社会、小学生の性教育、アウトドア活動実習Ⅰ～Ⅱ、課外活動指導実習Ⅰ～Ⅱ、地域社会活動実習Ⅰ～Ⅱ

◇分野科目(環境教育分野):

自然体験学習論、自然保護制度論、第一次産業と地域社会、観光イベントと体験学習、漁業と地域教育、観光と地域教育、環境教育実習Ⅰ～Ⅱ

資料8. 地域教育開発専攻の特色化づくりにむけて。

教員K.K.による。(2005年2月2日)

(1) どのような教師が求められているのか。

ベネッセが発行する機関誌、および「教育界で求められている教員の資質」(資料9)を参考にして、今日求められる教師像を列挙すると概ね次のようなものであると考えられる。

1. 基礎学力を向上させることができる専門知識が豊富な教師
2. 不登校や学級崩壊を未然に防ぐことができる指導力のある教師
3. 価値観が多様化している保護者の話が理解でき、複雑化する家庭環境に対応できる教師
4. 職場の教員の協力関係を築き、課題の解決のために組織的に取り組むことができる教師
5. 僻地校や少人数教育の指導ができる教師
6. 自然保護を実践し、体験学習や環境教育を安全に効果的に行える教師
7. 北海道の歴史や産業構造を熟知し、郷土の発展に貢献しようという見識を持つ教師
8. ユーモアがあり、児童から好かれ、力強く引っ張っていくことができる教師
9. 地域のリーダーとなり、住民とともに汗を流し、自ら地域の活性化の核となる教師
10. 市民生活のお手本となることができる教師
11. 大きな声でゆっくりと明瞭簡潔に話ができる教師
12. 児童の話を支えにじっくり聞くことができる教師
13. 新聞を毎日読み、社会の動向や政治経済国際情勢に明るい教師
14. 批判を受け入れる器量があり、自己改革に努めることができる教師

以上のような資質を養成していくとなれば、これまでのような教科専門科目を中心とした教育指導体制では不十分であると思われる。例えば、3、4、10などにあるような、保護者とのコミュニケーションや人間関係の円滑化、職場や地域でのリーダーシップという項目には、幅広く円熟したソーシャルスキルが必要となってくる。そのため、現在強調されている「実践」というキー概念は、「学校現場で子どもと巧みに接する技術」のみを意味するのではなく、教育成果をあげるために必要な人的社会的環境を、実社会の中で整備していく力量を含むものでなくてはならない。こうした力厶を育てるためには、大学内部の講義だけではなく、広く大学外部の実社会との接点を用意し、そこで学生に一定の実務的訓練を与える必要があるだろう。

(2) 高校生は大学に何を求めているのか

ベネッセ教育研究所が行った、高校生の進路意識調査から、高校生が大学によせる期待や価値観を分析してみよう。[注：教員K.K.による資料には回答結果についての詳細な棒グラフデータが添付されていたが、ここでは省略する]

○「生徒は進学に際してどんな価値観を持っているか」の設問に対する回答結果で、「とてもそう思う」と「まあそうおもう」を合計すると、以下のようになり、「自分のやりたいことができる学校」を選択している生徒がもっとも多い。

- |                    |     |
|--------------------|-----|
| 1. 自分のやりたいことができる学校 | 89% |
| 2. 自分の個性や能力を生かせる学校 | 86% |
| 3. 社会で役立つような知識、技術  | 73% |
| 4. 資格を取得できる学校      | 69% |

○「生徒は進学に際してどんな情報をいつ頃必要としているか」の設問に対する回答結果からは、生徒は学部学科の内容を一番知りたがっていることが伺える。

○「進学意識における希望の強さ」の設問においては、大多数の高校生は、「就職実績」よりも「自分の希望する学部」の方を、「有名な大学」よりも「自分の希望する学部」の方を、そして「偏差値の高さ」よりも「自分の希望する学部」の方を選んでいる。

ということは、就職実績が低くても、有名な大学でなくても、偏差値が高くなくても、「自分の希望する学部」であることを、高校生は期待していることになる。釧路校ならこの期待に十分応えられるのではないか!

資料9. 教育界で求められている教員の資質。

(2004年度北海道地域教育連携推進協議会で出された意見からの抜粋)、教員K.K.による。(2005年2月2日)

- 学級経営ができる。トータルで人間性を含めた総合力を持つ。
- ヒューマン・スキル。ディスカッションができる。マニュアルに頼るのではなく、独創性や自分で考える力を持つ。生徒の実態に応じて教える。
- 遊びを通した人間関係づくりのできる人、自己表現能力のある人。
- 情熱と使命感を持った教師。
- 人間が好きで熱意のある人。

(5) 「野外教育分野」の担当予定教員会議のまとめ

教員K.K.による提案を受けて、「野外教育分野」の担当予定教員[の]会議で、それをたたき台に専攻の目的が検討され、その目的に即したカリキュラムの案がつくられた(資料10)。この案では「野外教育」という名称はやめて、「アニメーター教育」という名称に変更している。この案に示された「目的」では地域の潜在的教育力に着目す

べきことが強調され、教員養成大学のカリキュラム構成原理として大変ユニークなものとなっており、この意見は後の構想に活かされることになる。

資料10. 「野外教育分野」の担当予定教員会議のまとめ。  
教員K.K.による。（2005年2月3日）

【地域教育開発専攻の目的】

今日、学校教育は地域の力に頼らずには成り立たなくなっている。それは決して、学校や教師の無力を嘆く意味ではない。きわめて大胆に、かつ緻密に運営されている学校でも、あるいは、いかに勤勉で熱意のある教師が多数で束になってかかっても、地域にはそれを上回るほどの底力があるということを意味している。地域教育開発専攻では、こうした学校が持たない地域の潜在能力を積極的に教育に活用していくために必要な資質と技能を備えた人材を育成することを目的とする。

【アニメーター（animator）教育の目標】

アニメーターとは、組織や人に元気と勇気を与えてその活力を高める人のことである。このアニメーター教育分野では、北海道の雄大な自然環境を舞台としたアウトドア活動と、住民と一緒に汗を流す地域社会活動を通じて学校と地域に希望を与え、両者の間にかたい協力関係を築きあげるコーディネーターの役割を果たす人材を養成する。

アニメーターが活躍する場面は幅広い。北海道の夏、重いリュックをかついで黒岳や旭岳を越える大雪の縦走をやり遂げる。北海道の冬、然別湖の氷上でキャンプを張りながらシマフクロウやオジロワシなどの野生動物を追う。ここでは、綿密な計画と実行力、仲間とのかたい信頼関係、困難を克服する辛抱強さ、みんなで力を合わせて目的を達成する協力とリーダーシップを学ぶことができるだろう。

学校が直面している具体的な問題にも飛び込んでいく。アニメーターがフットワークよく地域を廻れば、一つの学校だけで閉じこもってやっていた茶道、華道、あるいはブラスバンド、文化系サークル活動を、複数の学校をつなぎ合わせ、地域の中からすぐれた指導者を見つけ出し、小学生と地域住民がコラボレートする重層的な活動へ発展させていくことができるだろう。スポーツも同様である。地域のすぐれた指導者やすぐれた施設を有効に活用し、複数のチームが互いに連絡を取り合いながら合宿を行ったり、メンバーを交換したりして、地域全体のレベルアップに貢献できるだろう。あるいはまた、すぐ小さくなって使えなくなる子どもの靴やジャージなどのスポーツ用品を、地域でおさがりとして共有するシステムをつくってホスト役をするような、次世代型地域子育てネットワークセンターなどもその一例である。

小学校教員といえども、今日問題となっている高齢者の健康や生きがいづくりの問題に、できる限り力を尽くすことは、地域住民の一人として求められる道義的任務である。アニメーターは、こうした難問に力を尽くす経験を通して、それまで無縁だった人と人をつ結びつけ、地域から孤独を取り除き、互いに刺激を与え、力を高めあう元気な社会をつ

くるのである。

人々に元気を与え、活力の震源地となるアニメーターは、学校に不足しているさまざまな力を地域から自由自在に引っ張り出してきて、教育に有効利用することができるだろう。お年寄りの「ことば」に耳を傾け、その貴重な財産を一つ一つ拾い集めて子ども達に聞かせてやることができるだろう。教師に不足した技能や経験を持つ人材を、地域から探して手をかしてもらうことも簡単である。こうして躊躇せず、ずうずうしく地域の力を利用することができるようになれば、それはようやくアニメーターとして一人前になったといえるのである。彼は小学校教育において、必ずこころづよくて頼もしい支えになるだろう。

【専攻カリキュラム】

◇共通科目：

基礎講読ⅠA～ⅠC、基礎講読ⅡA～ⅡD、地域貢献人材育成入門、環境教育入門

◇分野科目（野外教育）：

学校と地域をつなぐ実践戦略、地域人材プロモーション、アドベンチャー成功法、余暇とライフスタイル、ユーモアとジョークの社会学、めざせ道東アウトドア完全制覇、野外教育演習Ⅰ～Ⅱ、地域社会教育演習Ⅰ～Ⅱ、野外教育実習Ⅰ～Ⅱ、地域社会活動実習Ⅰ～Ⅱ

(6) 専攻の人事を含めたデザインの前提

地域教育開発専攻の教員構成について、大学本部サイドのシミュレーションでは、「この分野にはこのような人材が所属することになるので、その結果このような分野内の専門構成になる」というような説明がなされていた。それに対して教員H.U.から資料11のような意見が提出された。この提案は、物質系と環境倫理学を除く分野に関しては2006年度開始までに実現されることになる。

資料11. 環境教育分野の教員配置について。

教員H.U.による。（2005年2月5日）

全国に自信を持って発信できる環境教育についての学生指導を行うのであれば、まずは分野内の専門構成をフリーハンドでデザインしてから、それに使える人材を集める（あるいは選択する）のが正しい方法だろうと思う。フリーハンドによるデザインからは、次のような人員配置が必要である。①環境教育プロパーの人材を最低でも2名置く。②理系では、生物系1名と物質系1名は最低必要。③自然地理は理系と文系をつなぐ境界領域。④文系では環境社会学あるいは環境倫理学の参加が望ましい。

(7) 専攻カリキュラム案

釧路校再編準備委員会による「地域教育開発専攻履修基準（原案）」（2005年2月18日）をベースとした、専攻の分野構成およびカリキュラム編成方針についての案が教員H.U.により提出された（資料12）。



資料12. 地域教育開発専攻カリキュラム案.

教員H.U.による。(2005年2月22日)

1. 分野構成

- ・学生40名を約半数に分け、2分野に分けて教育する。釧路校では教員1人あたり2.5人の学生が平均であるので、教員16名が目安となる。
- ・それぞれの分野に統一性(まとまり)があること。

(1) 野外教育分野:

<内容省略>

◇教員構成:

教育内容方法1名、体育科3名(内2名、新採用)、地域文化1名、人間科学1名(定年後、新採用)、自然教育(原体験)新採用

(2) 環境教育分野:

地域の自然環境を構成する諸要素のつながりを、実際の調査・体験活動を通して研究・教育し、それら自然環境の価値やそれを守る教育のあり方について、地域における実践を通して開発していく。

◇教員構成:

教育の方法(自然系)現員、教育の方法(環境教育学プロパー)新採用、生態系と自然(生物)現員、地域物質環境(地球物理)新採用、地域調査(自然地理学)現員、環境と地域社会(環境社会学)新採用、産業技術と環境(農業)現員、産業技術と環境(工学)現員、環境と情報(技術)現員

2. カリキュラム編成方針

- ・カリキュラムを受験生や進路指導教諭が見て魅力を感じずるものであること。
- ・授業名を見て、専攻の学習内容がイメージできるもの。
- ・授業が「寄せ集め」ではなく、相互に有機的につながり、全体像が描けるもの。
- ・教科の枠を意識した学校カリキュラム開発専攻とは異なり、「地域」「環境」「教育」をキーワードに総合的・融合的な内容のカリキュラムを構築する。

3. 講義内容のキーワード(担当教員):

◇野外教育分野:

<省略>

◇地域環境教育分野:

自然環境の教育(理科教育)、環境教育の方法(新採用(環境教育学プロパー))、生態系と自然(生物学)、地域の物質環境(新採用(地球物理))、大地のでき方(自然地理学)、環境と地域社会(新採用(環境社会学))、産業技術と環境A(農業)、産業技術と環境B(工学)、環境と情報(電気)

(8) 専攻のビジョンへの提言

しばらくして、教員K.K.から専攻のビジョンの建て方に関して資料13のような意見が出された。この意見は、受験生にとって魅力的な専攻をたてるための特色ある講義や実習を客観的なデータに基づいて工夫していこうというも

ので、とりわけ、アウトドア系の実習科目の内容やネーミングに反映されることになる。同じ日に、「釧路校の地域教育開発専攻を魅力的な専攻にするために」と題した提言(資料14)が教員H.U.からなされた。この提言は担当予定教員の頭の中にあるものを明示的に整理して強調すべきところを強調したものといえよう。とりわけ、他分校の類似専攻の予定授業科目群との比較を行ったことで本専攻の特色をどこに出していくべきかを明確にしようとしたものである。

資料13. 専攻のビジョンの建て方についての意見.

教員K.K.による。(2005年3月2日)

今後の専攻のビジョンの建て方に関しては、担当者がフリーハンドで、得意なものを優先して作るのではなく、目標を設定して、取り組むのがよいと思う。この第二専攻は、初年度志願者倍率最低5倍を目標にすべきだと思う。そのために、どうしたらいいのかを考える必要があるのではないかと。課程認定が必要かどうか、その目標達成に効果があるかどうかといった文脈で考えるべきであり、もっと他の方法で専攻の特色を打ち出す、ユニークな講義をもうける、受験生の関心を引くような実習を考えるべきであると思う。そして、これを考える上で重要なことは、我々の経験則で判断するのではなく、各種の調査データにあたる必要があるということである。私が調べたデータがあるので、ぜひそれらを参考にしてご検討頂きたい。

資料14. 釧路校の地域教育開発専攻を魅力的な専攻にするために—環境教育分野を中心にした考察—.

教員H.U.による。(2005年3月2日)

1. 全国区への発信

(1) 地域のメリットを生かす

- ・釧路湿原に接する。釧路湿原は人の生活と自然の接点(したがって環境教育の素材)としてよいモデルになりうる。
- ・阿寒、知床など他にも国立公園や道立公園など豊かな自然を近くに配する。自然体験、エコツーリズム、グリーンツーリズムの場として未開拓なものを多く含む。
- ・冬の寒さ、夏の霧、少し離れるが流水なども特色として生かせるだろう。
- ・道東の生活や産業(農業、漁業、工業)と環境とのかわりについて、新しい視点を創出していく。

(2) 人的資源

- ・釧路湿原、釧路川、霧多布などにかかわりをもつ「自然との通訳」「自然の番人」の豊富な資源を持つ。また釧路校教員における蓄積も大きい。
- ・これら教員がひとりひとり蛸壺方式で学生を指導したのでは成果があまり上がらないだろう。教員間の研究内容の連携(必ずしも共同研究をするということではなく、互いの研究内容を認知しあい、つながりをもつ

こと）や教育内容の連携が必要。

(3) 斬新なアイデア

・釧路校でしかできないもの（自然、地域、スタッフのメリットを総合）は何か。それを明らかにする。授業科目名のネーミングはピッタリかつ斬新なもの。「地域の自然環境」「地域社会と環境」など、あまりにも正直すぎるかもしれない。これらをたとえば、「タンチョウのいる自然」、「牧草ロール考」などとしただけで受験生の関心がぐっと増すのではないか？

2. 他分校の類似専攻との差別化

◇札幌校総合学習開発専攻は、「環境」を冠した専門科目が並び、アカデミックなイメージがある。釧路校では地域の自然と人のつながりという資源を生かし、実際に実行しうる環境教育の開発、環境教育のできる人材・教員の養成を主眼とすべきであろう。

◇岩見沢校スポーツ教育コース、アウトドア・ライフ専攻は、徹底的にアウトドアであり、身体的である。釧路校では、人と人のつながり、地域の生活、地域の自然そのもの、環境問題、環境教育へのとりくみを特色とすることができるだろう。

◇函館校環境科学専攻は、「環境」を冠した理系の専門科目が並ぶ。釧路校では、自然・地域・環境・人・教育の融合したものを目指すべきだろう。

(9) 専攻カリキュラムの準完成型策定

カリキュラム策定期限ぎりぎりの時点で専攻会議によってまとめられた、具体的なカリキュラム案を資料15に示す。これは実際の授業担当予定者が責任をもって提示または同意した授業科目のリストでもあり、これ以降の専攻カリキュラムの具体的な授業科目名がほぼ揃った準完成型のカリキュラムといえるものである。当然ながら、これまでに提案された意見のよいところは取り入れ、修正・追加・削除すべきところはそのようにして、練り上げられたものである。これ以降の授業科目名の変更、加除は微修正と見ることができ、一連の論議がここにほぼ結実したと見ることができる。資料16に最終確定カリキュラム（平成18年度実施）を掲げる。ただし、資料16において\*印を付した授業科目は、本専攻での新採用人事（子どもと環境教育、助教授1名）が認められたことにより、専攻会議の議を経て2007年度に付加された授業科目である。

資料15. 地域教育開発2006年度カリキュラム. 地域教育開発専攻担当予定者会議による. (2005年3月4日)

【授業名リストおよび授業担当者】

◇共通必修科目（1年次、必修）:

地域を読む（基礎購読Ⅰ）、環境を読む（基礎購読Ⅱ）、地域教育入門、環境教育入門

◇共通選択科目（1～2年次、選択必修）:

道東アウトドア・トライアル、環境ボランティア、地域ボランティア、湿原を科学する、地域と情報ネットワー

ク、地域活動のコーディネート、アドベンチャー教育法、余暇とライフスタイル、子供の健康科学、地域文化を見つめる

◇分野科目（地域教育分野：2～4年次、選択必修）:

野外教育演習Ⅰ～Ⅳ、地域社会演習Ⅰ～Ⅳ、地域文化演習Ⅰ～Ⅳ、地域情報発信演習Ⅰ～Ⅱ、野外教育実習Ⅰ～Ⅱ、地域社会実習Ⅰ～Ⅱ、地域文化実習Ⅰ～Ⅱ、地域情報発信実習

◇分野科目（地域教育分野：2～4年次、選択必修）:

環境教育のコーディネート、地域の生態系、自然の調べ方、地域社会の調べ方、産業技術と環境、環境教育の方法演習Ⅰ～Ⅳ、地域の自然環境演習Ⅰ～Ⅳ、地域社会と環境演習Ⅰ～Ⅱ、産業技術と環境演習Ⅰ～Ⅳ、環境教育実習Ⅰ～Ⅳ

資料16. 地域教育開発2006年度カリキュラム. 2006年度北海道教育大学釧路校履修基準による.

◇共通必修科目（1年次、必修）2:

地域を読む（基礎購読Ⅰ）1、環境を読む（基礎購読Ⅱ）1

◇共通選択科目（1～2年次、選択必修）:

{東北道アウトドアトライアル1、釧路湿原エコウォッチング1、地域ボランティア1、地域産業トライアル1、地域と情報ネットワーク1}から2；{アドベンチャー教育2、地域健康教育コーディネート2、地域文化と触れ合う2、環境リテラシー2、地域の自然環境2、地域社会と環境2、環境と産業技術2、子どもと環境教育2\*}から4

◇分野科目（環境教育分野：2～4年次、選択必修）:

{環境教育プランニング演習Ⅰ、子どもと環境教育演習Ⅰ\*、地域の自然環境演習Ⅰ、地域の生態系演習Ⅰ、地域社会と環境演習Ⅰ、環境と農業演習Ⅰ、環境と工業演習Ⅰ；各2}から4；{環境教育プランニング演習Ⅱ、子どもと環境教育演習Ⅱ\*、地域の自然環境演習Ⅱ、地域の生態系演習Ⅱ、地域社会と環境演習Ⅱ、環境と農業演習Ⅱ、環境と工業演習Ⅱ；各2}から2；{環境教育活動Ⅰ～Ⅳ、V\*；各1}から1

◇分野科目（地域教育分野：2～4年次、選択必修）:

{アドベンチャー教育演習Ⅰ、地域健康教育コーディネート演習Ⅰ、地域文化演習Ⅰ、地域情報ネットワーク演習Ⅰ；各2}から4；{アドベンチャー教育演習Ⅱ、地域健康教育コーディネート演習Ⅱ、地域文化演習Ⅱ、地域情報ネットワーク演習Ⅱ；各2}から2；{地域教育活動Ⅰ～Ⅳ；各1}から1

(10) 「研究発展科目」

専攻科目がほぼ確定した後、研究発展科目の内容についての検討が開始された。その中で、環境教育および地域教育にかかわる、より発展的な学習を促すための科目がいくつか提案され、専攻会議での論議をもとに取捨選択されて

いった。それに加えて、技術科教育講座の教員から中学校技術科の教員免許指定科目を発展科目に加えたいとの要望が出され、いったんはすべて盛り込まれた。しかし、釧路校では中学校技術科の課程認定は受けないという本部サイドの方針が不動であったため、これら免許指定科目を取り下げ、環境農学や新エネルギー、新材料といった本専攻の発展科目としてふさわしい科目数本を置くことにした。資料17に最終的に本部で承認された研究発展科目群を掲げる。

**資料17. 地域教育開発専攻の研究発展科目（10単位）。**

2006年度北海道教育大学釧路校履修基準による、環境教育特講、環境地理学、環境心理学、保全生態学、山岳生態学実習、海洋生態学実習、地域教育特講、地域保健学演習、フィールド演習、環境農学、木材環境論、情報とコンピュータ、生活と金属、新材料の強さ、新エネルギー論

※この他、他専攻と共通な科目として、アラスカ体験実習、教師論入門、教職教養Ⅰ～Ⅱ、教職論入門、小論文指導論、および分校の全開設科目、全学連携による他キャンパス開講科目も研究発展科目に含まれる。

**(II) 地域教育開発専攻のカリキュラム構造とカリキュラム観**

この最終確定カリキュラムに反映されているカリキュラム構造とその土台となるカリキュラム観は、次のようにまとめられる。①1年次に基礎講読を通して読む力・考える力・討論する力の基礎をつける。②1・2年次に履修する共通選択科目には「トライアル」という言葉に象徴される自然体験、地域社会体験、産業体験に関するフィールド体験型科目をふんだんに用意し、活動を通して体験的に地域の特性や問題に気づかせる。③同じく1、2年次に履修する共通選択科目に「環境リテラシー」・「地域社会と環境」・「アドベンチャー教育」等の座学系の科目もほぼ同数用意し、フィールド体験と系統的知識との統合を促す。④環境分野に関しては、融合的・境界領域的な授業科目を配置し、総合的な視野を与える。⑤学生の分野所属は2年次以降、研究室所属は3年次以降として、学生の知識や体験、活動対象の幅を広げる。⑥研究室所属後の3、4年次は専門演習Ⅰ～Ⅱ等を通してより専門的に掘り下げ、また環境教育活動Ⅰ～Ⅳまたは地域教育活動Ⅰ～Ⅳの履修を通して理論面での学習を地域社会や地域生態系における問題解決活動・教育実践活動の創造へと結合し、学士論文の作成へとつなげる。

**3. 専攻の教育目的と特色**

資料2に掲げた「新教員養成課程設置準備室」の「釧路キャンパス分室」による地域教育開発専攻の「特色」（目的）は、まだ専攻会議の十分な論議を経ない段階で起案されたものである。専攻カリキュラムの策定が一段落した

2005年3月の専攻会議で「特色」について集中的に審議し、確定していった。資料18は専攻で本格的に本件について論議した後で、教員A.H.が資料2の文章を一部書き直したものの、資料19はその上で教員H.U.が書き直したものである。更に担当予定教員間の論議や分校再編準備委員会での論議を経て、教員T.T.による修正案が出された。この修正では「体験を通して児童・生徒の感性を育てる」ことが挿入されたほか、文章の流れが整えられている。その修正提案と分校再編委員会での検討結果を受けて、教員H.U.が再修正をおこなったものが資料20である。この再修正に対して、再度、教員T.T.をはじめ担当予定教員の修正意見が加えられ、よりこなれた分かりやすい表現の文章へと仕上げられた。これが釧路キャンパス分室を通して、再編実施本部に上げられる過程で字句チェックを受け、最終的に全学的に承認された専攻の目的・特色が完成した（資料21）。

**資料18. 専攻の教育目的と特色（本部資料を改定したもの）、教員A.H.による。（2005年3月2日昼）**

本専攻は、地域、特に道東地域の自然、地域社会、地域産業などを題材とした教材研究、教育内容、教育方法などの教育プログラムを開発する。本専攻のカリキュラムはフィールドワークを中心に構成され、多分野にわたる野外あるいは社会における実習や教育内容・方法を学ぶことができることから、総合的な授業を展開していくだけの力量をもった教員の育成が期待できる。

本専攻は、大きく、地域教育分野と環境教育分野とで構成されるが、両分野は教員・学生ともに相互に乗り入れ可能なカリキュラム体制をとる。両分野とも、道東地域の豊かな自然ならびに地域の社会・文化・産業などの地域的特性を活用して、地域教育ならびに環境教育における教育・体験プログラムの開発と実践を行う。これらは、学校教育のみならず生涯教育との関連性を強く意識しつつ展開されるのであるが、以上のプログラム開発と実践にあたっては、情報メディアも活用しながら組織的・計画的に自然や社会と関わり、学校教育現場等とも連携を図りながら取り組み、学校教育の中で地域教育と環境教育が展開できる教員の養成を目指す。

**資料19. 専攻の教育目的と特色。**

教員H.U.による修正。（2005年3月2日夜）

これからの学校教員や生涯教育に携わる人材に求められる大切な資質の一つとして、地域の自然や生活の中に学習素材を見出し、教科の枠にとらわれず、体験を通して児童・生徒の生きる力や自己教育力を培う、創造的かつ総合的な授業開発力があげられる。本専攻は、この地域における授業開発力を育成することを目的とし、道東地域の豊かな自然環境、自然と共生した酪農や漁業などの地場産業、地域の生活に溶け込んだ文化活動を素材に、教材・教育内容の開発、それらにみあった教育方法の創出などを包括した教育

プログラムの開発を行う。

本専攻は、大きく、地域教育分野と環境教育分野とで構成される。地域教育分野では野外教育、地域活動、地域文化、地域情報ネットワークにかかわる実践的・創造的な教育プログラム開発を行う。環境教育分野では、釧路湿原をはじめ豊かな自然環境の探求、地域社会と環境、産業技術と環境との調和等を題材に環境教育プログラムの開発を行う。本専攻ではカリキュラムにフィールドワークや地域との連携を豊富に取り入れ、内容と方法が一体化した教科融合型の指導体制をとるので、総合的な授業を自在に展開する力量をもった教員の育成が期待できる。

この専攻は、大きく、地域教育と環境教育の二分野で構成される。地域教育分野では野外教育、地域活動、地域文化、地域情報ネットワークにかかわる実践的、創造的な教育プログラムの開発を行う。環境教育分野では、釧路湿原をはじめとする自然環境の探求、地域社会と環境、産業技術と環境との調和などを題材とした環境教育プログラムの開発を行う。

さらに、この専攻は、分野融合的な教育を目指し、フィールドワークや地域との連携を豊富に取り入れ、体験と知識を結びつけるカリキュラムによって、教科の壁を越えた総合的な授業を自在に展開する力量と、児童・生徒の感性や生きる力を育む技量を合わせ持った教員の養成をめざす。

資料20. 専攻の教育目的と特色。教員T.T.の修正、分校再編委員会の修正を受けて、教員H.U.が再修正。  
(2005年3月3日)

この専攻は、地域に学び地域の魅力を高めるための地域教育や環境教育を開発する能力を育成することを目的とし、道東地域の豊かで多様な自然環境、酪農をはじめとした農林漁業の営み、地域の生活に溶け込んだ文化活動を素材とした教材や教育内容を開発し、授業プランにまで高め、広く教育界に発信していく能力を育成する。

また、この専攻は、地域教育分野と環境教育分野とで構成される。地域教育分野では野外教育、地域活動、地域文化、地域情報ネットワークにかかわる、実践的、創造的な教育プログラムの開発を行う。環境教育分野では、釧路湿原をはじめとした豊かな自然環境、地域社会と環境、産業技術と環境との調和等を題材として環境教育プログラムの開発を行う。この専攻は、分野融合的に教育を行い、フィールドワーク、地域との連携、内容と方法が一体化した教科融合型の授業をカリキュラムの中に豊富に取り入れる。このように体験と知識を縦横につなぎ合わせるカリキュラム体制をとることにより、総合的な授業を自在に展開する力量と、児童・生徒の感性や生きる力を育む技量をあわせもつ教員の養成をめざす。

## 考 察

本専攻のカリキュラム設計においては、1年次で「体験と基礎知識」、2年次で「興味に合わせた、更なる体験活動と知識の積み重ね」、3年次で「専門的な、活動と知識の統合」、4年次で「個人や協同での主体的な取り組み」がなされるように科目の履修学年指定を行った。その理由は以下の通りである。

新入生の多くは、大学受験を経験する中で、知識を蓄えることに偏した学び方をしてきている。この学び方から脱皮させるため、まず1年次には、知識と対極にあるとみられる感性を蘇らせ行動力を培うものとして体験活動を位置づけ、地域における自然観察活動や野外活動をふんだんに授業に取り入れた（授業科目：エコウォッチング、アウトドアトライアル）。また、異世代との対話にチャレンジする体験（地域文化と触れ合う）や社会的活動への参加（地域ボランティア）、環境にかかわる現場に直接触れる体験（産業トライアル）を通して、コミュニケーション能力やボランティア精神を鍛える機会を用意した。このように1年次において、専攻学生が全体あるいは数名のグループでこれらの活動に集中的に没頭する体験や学びを通して、地域社会や自然環境への深い興味・関心を抱くようにすることで4年間にわたる学修の動機付けを行うことを企図した。

2年次では、大学と周辺市町村や民間団体・学校との協力や連携のもと、学生が個々の興味や関心にあわせて、地域や環境と密接に関わった活動を積み重ね、自分が選択し所属した分野についての知識や実践的な学習能力を高めることができるようなカリキュラム構成とした。正規の授業以外にも、学生は大学内外の様々な活動にボランティアや補助者として参加する中で、実践的な企画・運営方法を知り、人間関係を円滑に保つ力や社会人としてのマナーを学ぶことが期待される。学生はこのような実社会における実践の体験を通して、地域の教育力を活かしながら教育活動を営みうる力を身につけるとともに、学習意欲や自己教育

資料21. 専攻の教育目的と特色。

2006年度北海道教育大学釧路校履修基準による。

これからの学校教員や生涯教育に携わる人材には、地域の自然や生活の中に学習素材を見出し、体験を通して子どもたちの感性を育て、自分で考え、行動する力を培う、創造的で総合的な授業開発力がますます求められている。

そのため、この専攻は、地域に学び、地域の魅力を高めるための地域教育や環境教育を開発する能力を育成することを目的として作られている。そこでは、大学のある道東の豊かで多様な自然環境、酪農を始めとする農林漁業などの産業の営み、地域の生活に溶け込んだ文化活動を題材とした教材や教育内容を開発し、授業プランにまで高め、広く教育界に発信する能力を育成するプログラムを用意する。

力を高めていくと期待される。

次に、3年次においては、各教員または教員グループの研究室に所属し、少人数による専門演習や環境教育活動（または地域教育活動）を履修する中で、これまで行ってきた実技・体験・実践を専門的視点からの課題解決のプロセスや教材開発、授業プラン作成の中に位置づけることになる。3年次の夏期には小学校での教育実習が位置づけられており、教師に求められる7つの資質チェックリスト（北海道教育大学教育研究委員会 2006）のうち、特に「地域教育連携力」・「協働遂行力」を発揮して、「総合的学習の時間」・「環境に関わる教科融合型授業」・「生活科」・「地域と関わる内容の授業」への積極的取り組みが可能となる資質が養われると考えられる。

4年次には、大学4年間の集大成として、学生自らが発見した研究課題に関して個人や協同で主体的に取り組む。専門分野での環境教育や地域教育にかかわる卒業研究や教材・授業プログラム開発研究、地域と関わった主体的な企画・運営事業に取り組むことで、地域における実践力ある教員としての総合的資質が高めていくと期待される。

岡村ら（2004）は、教員養成系大学における野外教育指導者養成カリキュラムに関し、理論、実習、実技の履修順がどうあるべきかについて検討し、「実技→実習→理論の展開順にすることにより、実際的な体験に基づき理論の学習効果を高めることができる」こと、また「課程前半の間の空洞化を解消するためにカリキュラムに縦断的な幅をもたせる」ことを提案している。ここでは、実習は「実技の学習成果を活用する場」ととらえられている。

本専攻のカリキュラムの履修順は、1・2年生では、理論・知識よりも、まずは実技・体験・実践に重点をおき、3・4年生では、実習を交えながら理論を学習していくという点で岡村らの提案と一致している。

教員養成における環境教育カリキュラムにかかわって、広木（1997）は義務教育学校における環境教育が扱うべきカリキュラムの全体構造について独自の提案を行うとともに、教員養成大学・学部の教員が相互に連携したカリキュラムの構築の必要性を訴えている。今回の本専攻におけるカリキュラム構築はまさにその連携を実現したものであり、注目に値すると考える。

市川・今村は教員養成系大学・学部等における環境・環境教育科目についての調査分析を行い（市川・今村 2000 a）、更に「環境教育論（講義）」の提案を行っている（市川・今村 2000 b）。市川・今村（2000 b）においては、環境教育実践者に求められる資質として資料22に示す6項目をあげ、それらのうち、①は初等・中等・高等教育を通して獲得すべきもの、②と③は生涯教育を通して自ら獲得していくものであるが、④から⑥は環境教育実践者を育成する上で中心的な課題であり、「環境教育論（講義）」が担うべきものと考察している。

資料22. 環境教育実践者に求められる資質.

市川・今村（2000b）による.

- ①人と環境とのかかわりに関する基礎的な知識・技能
- ②市民として有すべき気づきや態度
- ③市民として有すべき体験・経験や、環境保全活動への参加経験
- ④環境教育実践者（教師）としての教授スキル
- ⑤環境教育実践者（教師）としてのプログラム開発（作成）能力
- ⑥環境教育実践者（教師）としての環境教育に関する理解

今回のカリキュラム開発は市川・今村論文を参照することなく行ったものであるが、本論文の執筆者一同も市川・今村（2000 b）によるリストがカバーしている資質の概要を結果的に共有していた。敢えて異なる点をあげれば、（一般的な市民としてのリテラシーの獲得ではなく）地域における実践を重視している点が、釧路校における環境教育教員養成カリキュラムの特徴である。これはグローバルゼーションのもとにおける大量消費社会の象徴である大都市圏における環境教育教員養成に伍して、全国から学生を集める戦略として北海道東部の自然環境を教育資源として活用しようということでの特色化でもあり、また、グローバルな環境問題に対して市民として立ち向かう（もちろんそれが必要であるが）よりも、地域において地域の環境問題や生活文化における問題の解決や自然と共生した生き生きとした地域づくりであれば、一人一人の力が実際に環境や社会を変えることも可能であり、具体的な問題解決につながるという考えからでもある。

本専攻は幸い、全国から多くの受験生を集め、その結果、意欲的で潜在能力の高い学生が多数入学してきている。専攻カリキュラムもすでにその8分の3が実施に移され、教員団も相互に緊密に連携しながら積極的に教育活動に従事している。今後、本論文の続報として、カリキュラムの目的が達成されているかどうかを主眼とした実践研究をいくつか報告していく計画である。

要 約

北海道教育大学釧路校に2006年に新設された「地域教育開発専攻」のカリキュラムは担当予定教員同士の活発なアイデア交換を通して、全国的にもユニークなものが練り上げられた。すなわち、北海道東部の多様な自然環境、地域社会をフィールドに、地域の機関や人材と連携した実践活動をふんだんに採り入れ、コミュニケーション能力や企画力、行動力、実践力のある小学校教員を養成しようというものである。そのカリキュラム構造は次のとおりである。1・2年次に読む力・考える力・討論する力の基礎をつけるとともに、アウトドア活動、自然体験や産業体験、ボラ

ンティア体験をたっぷり行い、教科融合型の入門講義の内容を深いところで理解するための一助とする。3、4年次では専門演習や実践活動を通して、課題発見や問題解決のための地域教育・環境教育のプログラムづくりにチャレンジする。

### 謝 辞

カリキュラムおよび専攻の目的の策定過程で有益な意見を提出された、池田保夫、岡嶋 恒（現、岩見沢校）、小川隆章、神田房行、小松丈晃、佐々木翼、篠木芳夫、長澤 徹、中村太一、松浦勇二の同僚諸氏（五十音順）に謝意を表したい。

### 付 記

今回報告するカリキュラムに基づく地域教育開発専攻の教育実践活動が平成19年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」に選定された。詳細については、<http://ckk.kus.hokkyodai.ac.jp/gp/index.html>を参照されたい。

### 引用文献

- 阿部 治, (2005). わが国における国連持続可能な開発のための教育の10年の取組と課題：科学教育への期待をこめて. 日本科学教育学会 第30回年会論文集, 30 : 355-358.
- Gregorio, L. C., (2006). Think globally act locally : environmental education has always been here. 環境教育 32 : 46-50.
- 広木正紀, (1997). 環境教育の課題と教員養成大学の役割：三段階の目標から成る、環境教育の枠組みの提案. 京都教育大学環境教育研究年報, 5, 41-51.
- 北海道教育大学教育研究委員会, (2006). 学び続け自己を高める教師をめざして—教育実践フィールド科目ハンドブッカー. 北海道教育大学.
- 市川智史・今村光章, (2000 a). 教員養成における環境教育カリキュラムの開発(1)：教員養成系大学・学部等における環境・環境教育科目. 滋賀大学教育学部紀要. I, 教育科学 50 : 67-79.
- 市川智史・今村光章, (2000 b). 教員養成における環境教育カリキュラムの開発(2)：「環境教育論（講義）」の提案. 滋賀大学教育学部紀要. I, 教育科学 50 : 81-88.
- 「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議, (2005). 「国連持続可能な開発のための教育の10年国際実施計画案」全文仮訳. ESD-J 2004活

動報告書「国連持続可能な開発のための教育の10年」キックオフ, pp.158-197.

岡村泰斗・中川もも・米山絵理・荒木恵理, (2004). 教員養成系大学における野外教育指導者養成カリキュラムのあり方. 奈良教育大学紀要. 人文・社会科学, 53 : 73-82.

出光直樹, (1997). 大学設置基準大綱化と学士教育. 清水畏三・井門富二夫 編「大学カリキュラムの再編成」. 168-182頁. 玉川大学出版部.